

# 「国語の力」の成立過程 XVI

— 国語教育学説史研究 —

野 地 潤 家

一七

「国語の力」(大正11年5月8日、不老閣書房刊)の第三章は「言語の活力」について考察が加えられ、垣内松三先生の独自の言語研究観がうかがわれる。

垣内松三先生は、この第三章の冒頭を、「言語研究の新潮」として、つぎのように起こされた。

「モウルトンが在来の言語の研究の方法を批評して、恰も、中世の王侯が河口に城郭を構えて、往來の船の行き先きを厳しく検べて税を課したように、文を読む時にも、すら／＼と通さないで一々の言語を一々に引止めては重税を賦課するといったのも面白い。これに依つて見るとこうした因襲的な研究法は独り我が國の研究法のみではないのである。併しそれはもう大抵過去のこととなった。言語の外面的研究はその内面的研究に推移した。単語の研究、文章法、措辞法等は言語の活力・芸術的表現と思想との關係に於て研究することゝなつて居る。言語は、個性の内面に於ける直観を整理し、それを純一にし、定着せしむる作用であつて、それを形に見せるものであるから、この立場からのみ言語の意味が解釈せらるゝのであり、またそうした解釈のみが言語を研究することを意義あらしむるので

ある。」(有朋堂版「国語の力」、一二八—一二九頁)

在來の言語研究が内面的研究に推移したことが指摘され、新しい言語研究のありかたが提示されている。

さて、垣内松三先生は、「言語の活力」について説述するにあたり、「理論的敘述を避けて、言語の研究の際に常に憶い出す、次ぎの話から重要な問題を導き出した。」(有朋堂版「国語の力」、一二九頁)として、五十嵐力博士の記述された話をそのまま引用された。— つぎのような挿話である。

老農友H氏の話である。

日本の古言には簡単な裡に実に奥深い真理を含んだのがあるものです。ね。いつぞや——もう二十年にもなりませうか——海上嵐平といふ歌人が高崎正風といふ人の歌を評した中に、高崎氏の歌に「牛牽く云々」とあつたのを始め、外國は知らず我が國では、昔から牛には「追ふ」と云ひ來つたものであるのに、「牛を牽くといふのは落着かない詞遣だ」と云つたのがありました。当時私はそれを見て、歌人なんて暇つぶしに下らん事を云つて楽しんで居るものだと思つて、馬鹿にして居りましたが、其の後十数年経つてはッと思つ

たことがありましたよ。

それは斯ういふ訳です。

或日牛を一匹板橋まで送つてやる用があつて、一人の男にあづけて出してやりましたが、程なく走つて来て、「乞食橋の向ふまで行くと、牛が坐り込んで、どうしても動かなくなりまして。」といふのです。「意気地のない弱虫だ。それぢやお前が行つて手伝つてやれ。」と云つて、小力のある他の男を付けてやりましたが、しばらくすると、それが又帰つて来て、「二人では、どうしても立ちません。」と申します。「馬鹿な奴だ、二人掛りで牛一匹動かせない奴があるか。それぢや五平、お前行つてやれ。」と申しますと、五平は「情ない奴だな、それぢや己れが一つ立たしてやらうか。」など云つて、威勢よく出かけて行きましたが、しばらくすると、それもまた帰つて来て、

「旦那、どうしても動きませんよ。今日はどうかしたんですな。打つても、叩いても、引張つても、だまして、一寸も利きませんや。」

と申しました。私は「をかしい事だ、しかし己れが行けばどうにかなるだらう。」

と怪しみながら、動物に対する飼主の威光と、男共には多少優つた一日の長とを頼みにして急いで行つて見ますと、成程、牛の奴が木戸邸（今の磨兵院）の裏門の前に大盤石と腰を据ゑて居り、まはりには真黒に人だかりがしてゐます。それから私は三人の男に手伝はして鞭うつたり、あやししたり、いろ／＼と工夫をして見ましたが、どうしても一寸も動かす事が出来ません。

困りぬいて呆然として居りますと、人だかりの中に、半纏を着て

股引をはいた馬方らしい六十恰好の老爺さんが居りましたが、

「旦那、それぢや動きますまいよ。私が一つやつて見ませうか。」

と云つて呉れました。「それは有難い、是非に」と云つて、ねんごろに頼みますと、老爺さんは私の手から鼻綱を取つて、静かに牛の右側に立ちましたが、右の手に持った綱を伸ばして、牛の尻辺を軽く打ちながら、「しつ／＼」と申しますと、大盤石の牛が、忽ち一身振ひしてムツクリと起き上がりました。それから老爺さんは、後ろの方に立つて尻を打ちつゝ、二度円く引き廻はしましたが、やがて三四十間追つて行つて、

「さあ、かうして後ろから追つていらつしやい。もう大丈夫です。」

と云つて綱を渡して呉れました。

私は厚く礼を述べて別れましたが、此の時電光のやうに私の頭に浮かんで来たのは、例の海上氏の云はれた、牛には「追ふ」といふ我が古言でありました。私は一向古学に不案内ですが、古い大和言葉の中には、いくらか斯ういふ風に、祖先が幾百年の経験を結晶させて、三四字の中に不動の真理を畳み込んだのがあることであります。言葉の味はひなんといふものも、実にえらいもんですな。」

私は此の老農友の話をば、賈島が「推敲」の話よりも、応挙が「猪のしゝ」の話よりも、観世大夫が「木賊刈」の話よりも、フロールベルが「一語説」よりも、更に面白く更に意味が深いと思ひ、黙すにもだされずして備忘することにした。（五十嵐力氏）（有朋堂版「国語の力」、一二九—一二三二頁）

右の老農友H氏の話は、五十嵐力博士の随想集「八重むぐら」

大正6年4月4日、敬文堂書店刊)に収められている。同書の「八重葎の這ふまゝに」という文章の中に収められている。この文章には、「八重葎の這ふやうに、聯想の蔓を勝手次第に這はして見ようといふのである。」(同上書、九三ペ)として、一二ばかりの話が記述されている。老農友H氏の話(前掲)は、その六番目にあたり、もっとも長い分量を持っている。

五十嵐力博士は、別に同書の中に「有難き老医」という文章を収めている。博士の私淑された「老医」(「堀本義明翁」)のことを思い出すままに「ポツ／＼書き」にまとめられたものである。この「有難き老医」という文章の「前おき」にあたる部分に、つぎのような一節がさしはさまれている。

「私の近所に加島と云つて七十余歳になる米屋のお婆さんが居ります。達者で、働きの者で、正直で、世話好きで、みんなに信用されて居るお婆さんであります。此のお婆さんが郷里なる千葉県の田舎へ行つた時に、丁度近所の小娘で、茶屋に売られて行くといふのがありました。お婆さんは大層不関に思つて、東京へ行けばどうにかなるだらうといふので、急場を救つて伴れて来ましたが、自分の家の小間使にして、暫らく使つて居る中に、其の小娘がいつの間にかお爺さんの胤を宿しました。お婆さんはびつくりして、一時は非常に腹立ちましたが、篤と考へ直して、一切を不仕合とあきらめ、而して子の無いのを幸ひに、其の赤ん坊を育てることにして、それからしつかりと家を治め、夫が死んでからも其の女と子供とを面倒見て、波風一つ立てずに立派に暮らして居ります。私は之れを聞いて、かやうな人があつてこそ世の中も立つて行くのだと、其の心根を優しく床しく思ひました。」

私の書きたいと思ふのは、かういふ種類の、俯目がちな、腰の低い、北びら式の事でありませぬ。私の心は、どういふものか『偉い』『高い』といふやうな事を感じる素質を欠いて居ります。殊に『えらさ』『高さ』に関する人造の目盛に対しては、殆んど色盲かとも思はれるほど感じがありません。『位』『爵』『勲』『級』『博』などいふ文字に対しては、張子の虎のやうに八釜しい漢字だと思ふだけで、常に一種のはかない滑稽を感じて居ります。私はミスター、グラツトストーンなるが故にグラツトストーンを好んで居ります。素面の平民福沢諭吉君なるが故に福沢翁が好きであります。

思はず自分の偏屈な癖話になつてしまひましたが、私の謂はゆる『有難き老医』は九州の大大名の子と生まれ、後には赤坂田町の小ッぽけな下駄屋の古店に住んで、七十三歳(?)に至るまで生涯仁術を施した方であります。」(同上書、六九ペ)

これによつて、五十嵐力博士の人間観を知ることができる。老農友H氏の話がとりあげられるゆえんも、そこに見いだされる。

さて、五十嵐力博士は、随想集「八重葎」に収められた「老農友H氏」の「話」(挿話)を、「国語の力」が一九二二年(大正一一)五月に刊行されてから三年後の一九二五年(大正一四)秋、早稲田大学大隈会館における全国処女会代表者諸氏招待会席上においてなされた「国語の愛護」と題する講演の中で、具体例として引かれ、つぎのように述べられた。

「それから御手許に差上げた刷物に『牛を追ふ』といふ句が出て居りますが、これについては、稗田杉扉君といふ老農友の面白い経験談があります。それは管てつまらぬ隨筆集(引用者注、前出「八重葎」のこと。)の中に書き入れてありますので、既に御承知の御

方もありませうが、かういふ話で。私の近所に稗田君といふ、夙はやくに早稲田大学の政治科を卒業して後、数年来国に遊んで、帰つて来たらから牧畜農産の業に没頭して居る隱逸的の奇人がありますが、此の人が、或日所用あつて、一匹の牛を板橋に送りました。ところが暫らくすると、牛をつれて出かけた小僧が帰つて来て、『乞食橋』(三四丁離れた処にある橋)の側まで行くと、牛がすわり込んで動きます。』と云ひました。稗田氏は少し年上の牧夫をつけてやりましたが、それがまた間もなく帰つて来て、『二人で骨折つても、どうしても動きません。』といひました。稗田氏は、今度は牧場一の牛扱ウシウケに馴れた男をやりましたが、程経てそれもまた、すぐ〜と帰つて来て、『旦那、今日はどうしたものか、とても動きませんよ。』と云ひました。稗田氏は不審に思つたが、とにかく行つて見ると、成程、橋の袂に牛の奴が大盤石とすわり込んで、あたりに真黒に人だかりがして居りました。それから稗田氏は、鼻綱を執つて威しつすかしつ、いろ〜にあやなして見ましたが、さっぱり利きません。もて余して、がっかりして居りますと、人だかりの中から、法被を着た牛方らしい老人が出て来て、『私が一つ立たして上げませうか。』と云ひました。稗田氏が悦んで手綱を渡すと、老法被はその綱を取つて牛の右側に立ちました。其の端で牛の尻のあたりを二三度軽く打つと、大盤石の牛が、むつくりと起き上りました。それから彼れは、驚く群衆を尻目にかけて、三四度クル〜と引き廻して後に、手綱を稗田氏に渡して、『サ、此の綱を取つて、後から追つて入らつしやい。』と云ひました。

稗田氏は心から感謝して手綱を受取りましたが、それと同時に、古い一つの記憶が電光石火のやうに彼れの頭に浮かんで来ました。

それは 明治天皇の歌道の御師匠様であつた高崎正風翁といふ人の作つた歌に関する話で、かういふのであります。翁は曾て『牛ひく』云々といふ歌を詠んだ時に、海上風平といふ老歌人のやかましい批評家が、それを評して、牛にひくといふのは面白くない、大和詞では、『牛には追ふと言ひ来つたものである。』と云ひました。稗田氏は此の批評を読んで、歌人なんていふ者は、閑に任せて下らぬ事を云つて居るものである。馬鹿々々しいと思つて、其の後十数年間、唯だの一度も思ひ出したことがなかつたが、其の記憶が今、飄然、忽然、猛然として、意識の面を頭をもたげ出して来たのであります。

大和詞といふはえらい尊いものです。『牛を追ふ』——唯だ此の一つの言葉にも、吾吾の祖先の幾百年幾千年の経験が、煎じつめて、壘み込められて居るのですからね。

これが稗田氏の述懐でありましたが、かういふ例を見ると、国語の趣味威力といふものが、今更に感ぜられるではありませんか。」「(「国語の愛護」、昭和3年4月23日、早稲田大学出版部刊、三一—三三頁)

随想集「八重葎」所収の老農H氏の話と論集「国語の愛護」所収の講演記録としての老農稗田氏の話とは、素材はまったく同じものであるが、その述べ方にはかなりのちがいが認められる。随想集「八重葎」に収められているほうが、書かれたものだけに、文章全体の組み立ては、わかりやすくしつかりしている。

なお、五十嵐力博士は、昭和十三年(一九三八)十一月に、新しい「国語の愛護」(昭和十三年十一月十五日、白水社刊)を刊行され、その中に、例の講演記録「国語の愛護」を再び収録された。それによ

ると、本文中の「それは 明治天皇の歌道の御師匠様であつた高崎正風翁といふ人の作つた歌に関する話で、かういふのであります。」(白水社版「国語の愛護」、一三八―一三九)のつぎに、左のような補注が加えられている。(この高崎翁の歌といふのが稗田氏の記憶の誤りで、実は小出繁翁の「賤の男が牛ひきかへるうしろ影見る」消えて野は暮れにけり」に対する海上翁の批評であつたことが、昭和十一年になり、三宅光華、松田好夫二氏の好意によつて明らかになりました。)(同上書、一三八―一三九)

ちなみに、早大出版部版「国語の愛護」は、第一国語の愛護、第二国語の重要な着眼点を論ず、第三エーリー氏の『英訳源氏物語』を読む、第四貫ふか、与へるか、第五雄弁そごごと、第六教育家としての坪内逍遙先生、の六編をもつて構成され、講演記録「国語の愛護」は、その初めに置かれていた。それに対して、白水社版「国語の愛護」のほうは、第一子供を相手のつもりで試みに国語を大事にすべきことを語る、第二部分品(国語教育私論)、第三国語国文の重要な着眼点を論ず、第四国語の愛護、の四編をもつて構成され、講演記録「国語の愛護」は、そのおしまいに据えられていた。

「国語の力」に引用されている挿話では、「しばらくすると、それが又帰つて来て『二人では、どうしても立ちません。』と申します。」(有朋堂版「国語の力」、一三〇―一三一)という文の中で、「二人では、」となっている。これは、「八重葎」では、「二人でも、どうしても立ちません。』と申しました。」(同上書、一〇一―一〇二)となつており、講演記録「国語の愛護」では、「それがまた間もなく帰つて来て、『二人で骨折つても、どうしても動きません。』とい

ひました。」(早大出版部版、三一―一三三)となつている。「二人でも」↓「二人では」、これは「国語の力」への引用にあたって、も↓はと変じたと見られる。

五十嵐力博士には、「半農生活そのまゝ」という文章があり、その中で、博士は、「私は明治四十年の春以来、小石川裏の巢鴨といふ片田舎に引込んで、本読ともつかず、百姓ともつかぬ中途半端な生活をして居ります、初めは読み書き七分百姓三分といふ程の兼合に頭を使い分けて、暢氣さうに見えて実は甚だ氣の揉める暮らし方をして居りましたが、此の兼合が段々に交つて、いつの間にか五分々に近いものになつて来ました。今後は出来るものなら、先の兼合を倒まにして、百姓七分読み書き三分といふ処に進め、晴れには耕し雨には読み、朝日と共に起き、鳥と共に寝、鋤鍬を取つて大地といふお母さんの大きな懐に抱かれつゝ、心の本然の肌理を荒すやうな文明の風には、成るべく中たらないやうにして過したいと思つて居ります。/「to do good」は私には及びもつかぬ事です。

私は「to be good」の百姓であれば、それでよい、欲には土に活きる百姓の道を説き得ればよい、精神のこもつた百姓の歌が歌へればよい。けれどもそれがなか／＼出来さうもありません。」(「半農生活」、大正3年6月13日、弘学館書店刊、一―四)と、近況を述べられた。

五十嵐力博士が近所に住む老農友H氏(稗田杉扉氏)に出会われ、その「牛を追ふ」ということばに関する経験談を聞かれるに至つた機縁は、五十嵐力博士みずから選ばれた、その半農生活に発したのである。

五十嵐力博士は、老農友H氏の話に感じ入って、H氏の話を聞いて書きつけるに至った心情を、「私は此の老農友の話をば、賈島が『推敲』の話よりも、応挙が『猪のし』の話よりも、親世大夫が『木賊刈』の話よりも、フローベルが『一語説』よりも、更に面白く更に意味が深いと思ひ、黙止すにもだされずして備忘することにした。」（「八重葎」、一〇四―一〇五、有朋堂「国語の力」、一三二―三）と述べられた。賈島・応挙・親世大夫・フローベルらとは、あつと老農友H氏の話とが比べられ、それらよりもいっそうおもしろくいっそう意味が深いと考へて、進んで書きつけることになつたのである。

これらのうち、賈島の推敲の話については、すでに「文章講話」（明治38年6月4日、早稲田大学出版部刊）において、「文章の穩当」（第七章）の条に、つぎのように述べられていた。

「語句の穩当、是れ実に古来の文章家が最も苦心した事の一つである。説を立てて想を整ふるは彼等の事業の一半に過ぎぬ、自重する名匠に取つては之れを言ひ表はすことが寧ろ一層の難事であつた。穩当なる語句を案じて苦心した逸話は和漢東西に頗る多い。西洋に於いては、グレーが廢寺懐旧の哀歌、彼れは其の彫琢に十二年を費やした。ミルトンの『失樂園』は後人其の一字一句たりとも改めむと試みたが、半個の瑕疢をも見出し得ずして筆を抛つたといはる。支那には歐陽修が其の草稿を書斎の壁に貼り付けて添削又添削、原用いる字が逐に一つも無くなつたといふ苦心談がある。唐の賈島、或時驢馬に跨つて庵を出で、途中『烏宿池辺樹、僧敲月下門』といふ句を得たが、敲を推に改めたらばと思ひ煩うて、手もて推す真似敲く真似をしつゝ、心も空に進む中、忽ち人に誰何されて我れに

歸れば、思ひきや知らぬ家の玄関に乗りつけて居た。賈島もさすがに驚いたが、実を話すと、幸にも韓退之の家、退之も居合はせて敲が佳いと評を下したといふ話。後世文章を鍊ることを推敲といふは、これから起こつたのである。我が国には、狹生徂徠が南郭文集の序を書いた時書き捨ての草稿箱に満ちたといふ話、加賀の千代がほととぎすの十七字に一夜を吟じ明かした話がある。菅丞相が筑紫に左遷さるゝ時の歌『君が住む宿の梢を行くゝもかくるゝまでに、かへり見しか。かな』（『大鏡』）の最後の句『拾遺集』には『かへり見しか。や』とあり、謡曲『道明寺』には『かへり見ぞする。』とある。菅公が種々に試みられたのか、後人の加筆か、いづれにしても穩当を思ひ案じての作りかへであらう。凡べて如何なる思想にも必ず之れを表はすに恰も好い一語があり、此の一語を用ゐねば金輪奈落より生えぬいた様な大丈夫な文章は出来ぬ。点と点との最も短き距離は唯だ一条の直線である如く、如何なる思想事物にても之れを、最もよく表はし得る語は世界にたつた一箇の外無いといつて可い。」（同上書、九八―九九、新文章講話（縮刷版）、一五二―一五三）

五十嵐力博士は、賈島の推敲の挿話を中核にして、内外の多くの苦心した逸話群を挙げられた。「如何なる思想にても最もよく之れを表はす語は世界に一個あるのみ。」（右の引用文の末尾の上欄に置かれた文。フローベルの一語説の考へ方と重なる。）——こうした考へ方に立っていた五十嵐力博士が、後年老農友H氏の話に感銘するのは、ごく自然のことであつた。

さて、応挙が「猪のし」の話・親世大夫が「木賊刈」の話について、すでに「作文常識修辭学」（明治42年10月11日、文泉堂書房・服部書店刊）に、つぎのように説かれていた。

「如何なる事物でも、最も適切穩當に之れを言ひ表はし得る言葉は世界に只つた一つだけしか無い。此の唯だ一個の言葉を探がし当てる事が、古来の名匠の最も苦心した所で、之れを探がしあてねば神品傑作は出来あがらぬ。故に語句事例の穩當といふ事は一面からいふと文章道の極致というてもよい。疵の無い満足な文を目安とする基礎の論に於いては、これほど八釜しくいふ必要はないが、とにかく穩當なる語句を用ゑるといふことが満足な文章の一要件たることは争はれぬ。

これは文章に限つた事ではない。工人は最後の一匁に頭を悩まし、彫刻家は最後の一釐に思ひを凝らす。観世太夫が『木賊刈』の能を舞うた時に鎌の使ひ方について園原の百姓の批難に感じたのもこれである。応募が鶏猪のしゝの画について野人樵夫の評言に感じたのもこれである。名優が普通の女に扮する時は疊一枚を縦に八足に踏み、姫君に扮する場合には十足に踏み、老人の杖の持ち方は、貧人の場合には頭を少し出して握り、貴人には頭に拇指をかけるなどいふ細かな注意もこれがためである。此の注意、易きが如くにして実に頗る難い。後人が一字一句をも改め得なかつたと称せらるゝミルトンの『失樂園』でも魔將等が天上の光栄を失つて淋しげに立てるやつれ姿を松柏の大木が雷火に頭を焼き去られて楮原の中に立てるに比べた譬喩など、奇抜な所はあるが、猶ほ雷火は樹木の幹を伝うて縦に引き裂くもので、幹を其のまゝ残して頭だけを横さまに焼き去ることがないというて、譬喩不穩當の批難を受けて居る。ゲーテが有名なハムレットの性格評、ハムレットの最後は其の性格の發展より來たるべき自然の結果で、譬へば大木の種子を小さな鉢に蒔いたやうなもの、木は年々に生長する、根も亦之れと共に蔓る、根

の蔓つた結果、遂に鉢を割るに至るに同じというた名比喩なども、木は根の養ひ得る大きさ以上には長らぬものといふ事を知つた植木屋、盆栽家には不穩當なるこぢつけ譬喩と見えるかも知れぬ。語句事例が穩當でなければ文章が活きぬ事はこれでわかるであらう。」

(同上書、第一部基礎篇、二七六、第四に穩當なれ、五三―五五)

広い視野から、文章における語句の穩當性の問題について論じられてゐる。五十嵐力博士は、ここでも、「如何なる事物でも、最も適切穩當に之れを言ひ表はし得る言葉は世界に只つた一つだけしか無い。此の唯だ一個の言葉を探がし当てる事が、古来の名匠の最も苦心した所で、之れを探がしあてねば神品傑作は出来あがらぬ。故に語句事例の穩當といふ事は一面からいふと文章道の極致というてもよい。」(同上書、五三―五五)と、フローベルの一語説にもあたる見解を述べてゐる。こうした、一語觀(穩當觀)が胸底に存していたればこそ、五十嵐力博士は、老農友H氏の話に、とりわけ敏感に反応されたのだともいえるであらう。

五十嵐力博士は、その講演記録「國語の愛護」(大正一四年秋講演)において、前掲のような老農友H氏の話を述べた、そのつぎに、他の例を左のように挙げていられる。

「かういふ例は外にも沢山ありませう。極古い事を申すと、御承知の祝詞の大祓詞に、『底つ岩根に宮柱太敷立て……』といふ句があります。私などは幾度も読みながら、唯だ大家屋建築の際の地形がための誇張的形容とのみ思つて來ましたが、大正十二年の大震災の折に、工学博士の伊藤忠氏が耐震家屋の事を説かれた中に、大昔の祝詞に謂はゆる、『底つ岩根に宮柱太しき立て』といふのが建

築の理想である。岩を離れた土の上に建てるから、地震に遭ふと一たまりもなく揺りつぶされるので、岩盤の上に立てれば、家全体が

岩と一緒に動くから、めつたにつぶれるものではない。この岩盤の上に柱を立てる理想的建築法を、大昔の吾々の祖先が已に立派に道破し且つ実行して居たのであると云はれたのを見て、成程と感じたことがありました。また同じ祝詞の『祈年祭』の中に『手肱に水沫かき足り、向股に泥かき寄せて、取り作らむ興つ御年を……』といふ文章があります。泥田の中に、腕の附根まで、向股まで入れて、泥土をかきまはして稲を作れ、といふ意味であります。私の百姓友達が曾て此の文を見て、『実にえらい事を云つたものである。一体、田の草を除くのは、唯だ草を取るだけの仕事ではなくして、稲の根の生えて居る泥の中へ空気と日光とを入れる為めである。だから表面の草を取るだけでなく、カン／＼いふ烈日に照らされつゝ、煮え立つやうな田に浸つて、水の泡をブツ／＼立てながら十分に掻き廻さねばならぬので、この祝詞が、かういふ農作道の極意を原始的の言葉で簡潔に言ひ表はしてゐるのが、実に面白い。』と云つて、感嘆したことがあります。かう見ると、国語の力といふものも、なか／＼偉いものでせう。昔の言葉文章だけではありません。今でも同じことで、日露戦争の時の日本海大海戦の戦報に、『舷々相摩す』といふ文句があつて、評判になつたことがありますが、これなども、『舟端と舟端とが摩れ合つた。』といふだけの事で、言ひ表し方によつては、何のつまらない事ですが、それが『舷々相摩す』といふと、何とも云はれぬ面白さを見せてまゐりませう。私は、すべて斯ういふ所に意を用ゐて、成るべく自分の言葉をも立派にし、仲間同胞国民同士の言葉を立派にしたい、といふのであり

ます。』（「国語の愛護」、昭和3年4月23日、早大出版部刊、三三―三五、傍線は引用者。）

五十嵐力博士も、当時すでに「国語の力の偉大さ」に言及していただけるのである。老農友日氏の「牛を追ふ」ということばに関する話が深い感銘をもって受けとめられる素地は、五十嵐力博士のことば自覚に存していたといふべきであらう。

さて、五十嵐力博士は、その随想集「八重葎」（大正6年4月4日、敬文堂書店刊）を刊行される前年（大正5年）、「高等女子新作文」（大正5年5月21日、大日本図書株式会社刊）を世に送られた。これは巻一から巻四までを含む女子用作文教科書であるが、その巻四の初めには、文話として、「文章の穩当」ということがとりあげられていた。

「文章を作るに注意すべき事は、誤解されぬやうに書く事、解り易く書く事、人の氣をわるくするやうな詞遣ひをせぬ事、趣味を豊かにする事、順序立て、組合せをしつかりする事など、いろいろあるが、こゝに是等のすべてに通じて、其の目貫となり、冠となるべき一つの大切な注意がある。それは文章の穩当といふことである。

穩当は漢語では妥當、妥貼、妥安などともいふ。其の場／＼にピッタリと嵌まつた言表をせよといふ事で、少し委しく云ふと、一々の用語が写さるゝ事柄に適當し、語句事例の選択接排が場合々々に応じてよく掘わり、よく嵌まり、よく落ちつくやうにせよといふ事である。

すべて物事の美しく氣持よく感ぜられるのは、多くは、其の物の



美しい為めではなくして、寧ろ其の物の在るべき所にあり、置かるべき所に置かれる為めである。例へば、鬘まげは頬ほにあれば愛嬌あいせうを添へるが、類こゝろみにあつては醜い。御飯ごひは飯櫃いひ、飯碗いひの中なかにあれば綺麗きれいだが、吸物椀あぶらや菓子皿かしの中なかにあつては穢けがい。孔雀こくけうの羽うは孔雀こくけうの身みに着けば美しいが、鳥からの翼よくに挿さんでは相応あうはしくない。文章ぶんしょうも其そのの通りで、例へば『巨魁』といふ語は立派な語であらうが、之これを大石良雄の場合にあてはめて、『大石良雄は赤穂四十七士の巨魁なり。』と云うては落ちつかぬ。同じく『頭』といふ事でも、学校には校長といひ、銀行には頭取といひ、博徒かしたには親分といひ、大工には棟梁といひ、政黨には首領といひ、大臣には内閣総理大臣といふ。而して是等の語が如何に立派で上品で、又それを組立てた文句が如何に精確で明瞭でも、其の場々ばばに嵌はまつた語を据たまつけなければ、満足な文章とはいはれぬ。是れが穩当といふ事の非常に大切な所以である。

更に一例を引いて、こゝに『悔しい』といふ感情を言ひ表はすでしょう。王朝の大宮人ならば『くち惜しうこそ侍れ。』『残りをしさの極たぎみになむ。』などいふであらう、而してさういはねば優美な大宮人の心持が現はれぬであらう。徳川時代の武士ならば『残念至極でござる。』といふであらう、而してさう云はねば武骨な封建武士の魂が現はれぬであらう。今日の軍人ならば『実に遺憾ぢや。』といふであらう、而してさういはねば今の軍人の心持が現はれぬであらう。妙齡めうれいの女子ならば『わたし悔しいわ。』といふであらう、舌したのまはらぬ幼児ならば『くやちいいなく。』といふであらう、そしてさう云はねば二者それ々の心持が適當には現はれぬであらう。もし妙齡めうれいの女子に『遺憾至極』といはせ、武骨な軍人に『わたし

し悔しいわ。』といはせ、明治大正の人に『くち惜しうこそ侍れ。』といはせ、平安朝、鎌倉時代の人に『ほんとに悔しう御座います。』と云はせたならば、よしそれらの語が一粒々々にはいかに立派でも、到底落ちついた立派な文章とは云はれぬ。是れが穩当といふ事の、文章に必要で、又作文道の目貫とも冠とも云はれる所以である。

服部嵐雪といふ俳諧師が、謡曲『雷電』の一節を例にして、句を活かすには、いかにも適切で、都合よく其の場合にはまる事物を引いて来ねばならぬといふ事を門下に教へた事がある。『雷電』は、菅丞相が筑紫の配所に募もぜられて後、雷神となつて讒者の一類を亡ぼされるといふ筋を書いたもので、その中に、菅公の亡靈が比叡山延曆寺なる旧師の法性坊を訪はれた一節がある。月白つきしろき秋の夜半、法性坊が天下泰平の御祈りに取りかゝらうとして居ると、柴の戸をほとくと敲く音がする。松風しょうふうの声か不思議やと、物の隙より見れば、さきに筑紫で果てられたといふ菅丞相であつた。驚きつゝも内に請じて、『御薨去の由承つて色々いろいろに弔なぐさひ申したが、屈まがり候まをふやらん。』と尋ねると、『我れは此の世の入ではないが、切に頼み申したき事があつて驚かした。われ梵天帝釈の憐あはれみを蒙り雷神なるかみとなつて遠からず内裏に飛び入り、我れにつらかりし雲客うんかくを蹴殺なぐさうと思ふ。其の時は朝廷より必ず僧正を召さるゝであらう。かまへて御参りあるな、折り入つて願ねがひまらするは此の事。』といはれると、僧正は『折角の御頼みなれば、宣旨はあつても二度は参るまじ。』と答へらるゝ。丞相は重ねて『いや勅使たびゝに及ぶとも必ず参内あるな。』と頼まるゝ。押問答の末、僧正はきつとなつて、『王土に住める此の身なれば、勅使三度に及ぶならば、いかでか参内

申さざらん。』と答へられると、丞相の姿が見るゝ変はつて鬼のやうになり、

折ふし木曾の御前に、柘榴をたむけ置きたるを、おつ取つて喰みくだき、妻戸にくわつと吐きかけ給へば柘榴忽ち火焰となつて戸びらにはつとぞ燃え上がる。僧正御覽じて、さわぐ気色もましまさず、洒水の印を結んで、錢字の明を称へ給へば火焰は消ゆる煙の中に、立ちかくれ丞相は行方も知らず失せ給ふ。』

とある。風雪がいふに、こゝに柘榴を用ゐたのは動かぬ所である。腹の立つまゝ仏前に有りあふ物を取つたといふ所だから、一寸考へると蜜柑でも饅頭でもよささうなものだが、蜜柑や饅頭を噛んだでは火にならぬ。柘榴の色が燃え立つやうに紅で、其の外観が破裂弾のやうに威勢よく弾けて居ればこそ、之れを噛んで吐けば火焰となるとも想像されるので、此の場合、柘榴の外に使ふべきものがない。かやうな動かぬ材料、此の場合これでなければならぬといふ材料、他の物で代理の出来ぬ材料を用ゐたればこそ、此の文が活躍して居るのである。俳句に於いても此の用意が肝腎であるといふ風に説いて居る。

如何なる事物でも、最も適切穩当に之れを言ひ表はし得る言葉は世界に只一つ丈しかない。此のたつた一つの言葉を捜しあて、用ゐること、これが文章に落つきを与へる最も肝腎な要件で、文章の『みがき』『洗練』、『推敲』などいふのは、畢竟最適の一語を捜して用ゐることに外ならぬ。』（同上書、巻四、一八八頁）

これは、文話「文章の穩当」の前半にあたる。平明にしかも適切な用例を掲げつつ、説得力をもって述べられている。五十嵐力博士の文章觀の中核に、こうした「穩当」についての考え方が宿されて

いたと考えられる。

なお、右の文話「文章の穩当」は、「中等新作文」（大正6年2月15日、至文堂書店刊）の巻五の初めにも、収録されていた。内容は同じものであるが、二つにわけて、文話の一、文話の二として収められた。この「中等新作文」の教授用参考書として出された、「中等新作文参考書」（大正6年12月5日、至文堂書店刊）には、「文章の穩当」について、前掲「文章講話」・「新文章講話」中の所論などを引きつつ、補説が加えられている。それは、「穩当は文章の基礎的要件中の最頂点に位するものであるが、之れと共に修飾、組織等あらゆる方面をも支配する。見様によつては穩当は文章の極致と云つてもよい。語句事例の選択、按排に関して殊にさうである。』（「中等新作文参考書」、二二二頁、「新文章講話」、大正13年2月20日縮刷十一版、早大出版部刊、一六七頁）と結ばれていた。

さて、垣内松三先生は、五十嵐力博士の老農友H氏から聞いた話を引用した後、「用語に刻苦した、フローベルが言葉が心に近づいて来るほど美わしい」と謂つたのも、今更に想い合わせられて実に面白くも尊い話である。』（『有朋堂版「国語の力」、三、言語の活力、一三三頁）と、五十嵐力博士の引かれたフローベルに関連させつつ述べて、五十嵐力博士の備忘された老農友H氏の話に、深く共感していられる。五十嵐力博士の言語感覚・国語自覚と垣内松三先生のそれは、この老農友H氏の話を媒介として、うつくしく結びきあっている。

垣内松三先生は、さらに、つぎのように述べられる。

「この小話（引用者注、前掲老農友H氏の話）の中より、こゝに抽出したいのは、『追ふ』というような平凡な語の意味にそうした複雑な作用が纏まれて居るとは思わないのに、この説明を聞いて見ると、一語の意味でも複雑な心では解釈することはできないということである。試に辞書を見ると、『追ふ』という語の解釈には『後より付き及ばむと走る』『後に従いて急ぎ行く』『退け去らしむ』『過ぐす』というような意味を挙げてあるが、一つもこゝに必要な『追ふ』の解釈には当って居ない。又、『追ふ』と『牽く』とはそうした異つた意味を担当して居る言語であるとは思わないほど、大まかに考えて居るものが、この話のような場に於て、同意語ではないといふくらいのことではなく、全く異つた作用を示すことを見て打ち駁かるるのである。更にそれよりも興味ある問題は『祖先が幾百年の経験を結晶させて、三四字の中に不動の真理を畳み込んだ』ことを見せられたことである。」（有朋堂版「国語の力」、一三三頁）

——つまり、老農友H氏の話に対しての、垣内松三先生の理解・理會は、きわめて深切である。五十嵐力博士の採録された老農友H氏の話は、垣内松三という最上の理解者を得たともいえる。

垣内松三先生は、つづいて、さらに、つぎのように結んでいらられる。

「以上をいい換えて見ると、言語の解釈は文意の關係に於てその活力を示し、又、言語の存在の意義は、多くの近い意味の言語の間に在りて独特の意味を蘊むからであることを知り、又言語を透して文化史を知り得ることである。もし言語の解釈の作用が、かような対象に向うものであることを知つたならば、モウルトンの比喩に見

る、一々に呼び止めて重税を課するような解釈の仕方ではなくして、一々に速力を加えて自由に通行せしむるような解釈でなければならぬ。」（有朋堂版「国語の力」、一三四頁）

五十嵐力博士の聞かれた老農友H氏の話から、言語研究のありかたを触発され、さらにそのことにおもいを潜めていられる垣内松三先生は、言語の活力の典型を、この「話」に見いだされ、言語存在の独特の意義についてまなことをひらかれ、さらには、言語を透してその民族の文化史を知り得るといふことに深い興味・関心を抱いていられる。

「国語の力」の成立に関し、五十嵐力博士の言語感覚、ことば自覚は、垣内松三先生に多くの示唆をもたらす結果となつた。言語の活力について、眼をひらかれたことは、「国語の力」成立の根幹となつてゐる。

（昭和47年1月17日稿）（本学教授）